

蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘

〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番地10
TEL.(0258) 32-2811

◆スタッフ◆
安藤一夫 小林国二 小林善秋 高橋潔
佐藤正樹 近藤マリ子 近藤善信
印刷・(株)北越時報社



壇信徒の北海道紋別市在住 須藤秀雄様に描いていただいた安善寺門前スケッチ

ご家族の皆様でご覧ください

お盆の心

お盆は先祖代々の命を受け継いだ尊い自分に気づかされる

翠巖龍弘

暑中御見舞 申し上げます

盂蘭盆の季節になりました。お盆の行事は、本来七月十五日なのですが、東京など新暦の七月に行う地方と、旧暦の八月に行う地方があり、全国的には月遅れの八月が多いようです。月遅れの八月のお盆になりますと、電車、飛行機は満員、自動車も各地で渋滞がきます。お盆休みを利用しての家族旅行の方もおいででしょうが、大部分は故郷へ向かう人達ではないでしょうか。市町村の中には、成人式を八月のお盆のころに行なったり、学校の同級会、同期会などもそのころに開くことが多いようです。お盆は、都会に住む人々と故郷で迎える人々との心の触れ合いの時でもあり、特に家族にとっては、久し

ぶりに再会する大事な日々ではないでしょうか。

お盆とは、盂蘭盆(ウランバーナ)の略語で、「仏説盂蘭盆経」には、神通力を得た目蓮尊者が、餓鬼道に落ちて、逆さまに吊された(倒懸)ような苦しみを受けている亡き母を救おうとして果たしえず、お釈迦さまの教えに従って、七月十五日の「自恣」の日(雨期の三ヶ月間は遊行ができないので、祇園精舎や竹林精舎などで大勢のお弟子が集まって修行しました。これを「雨安居」といい、この雨安居の最後の日に自恣といって一堂に会し、各自が九十日の安居中の反省をする日)に大勢の修行僧を供養して、その精神力により、母を救ったという故事に由来するものです。日本では最初に行われたお盆は、六〇六年七月十五日、推古天皇の時と言われています。

ます。

『盆は嬉や別れた人も晴れてこの世に会いに来る』とうたわれているように、先祖を敬い、大事にしていた日本人の心情によく馴染み、日本流の形で定着し、今日まで承け継がれてきたのではないのでしょうか。

お盆は、家族や、地域の人々との絆を深めるだけではなく、多くの先祖代々の命を受け継ぎ、今日の自分の存在があるということに無意識のうちに気づかせられ、自分自身の尊さをも気づかせてもらう日々でもあります。現代は、住宅事情や勤め関係で、家族の別居がふえ、核家族化が進んでいますが、お盆には家族が集まり、ご先祖さま共々一時を過ごし、肉親を思う優しくあたたかい思いやりの心を育てたいものです。

合掌

「お盆」は、正式には「盂蘭盆会」(うらぼんえ)と呼ばれる仏教行事です

中国旅行の思い出

北京、西安を巡って

長岡市●品田 勇

ご縁があつて、旅行が中国でしたので参加させていただいた。メンバーは二十五名ほど。五月六日から、北京、西安を巡る五日間の旅である。

出発当日は天候にも恵まれ、方丈様から安全祈願の読経をお受けし、添乗員の注意事項を聞いてバスで新潟空港へ出発。ときどぎスチュワーデスの中国語が耳に入ってくる待機中の中国航空機に搭乗した。蒼い空と雲海の中を飛んで、雑談を交わすうちに中国大陸が見え始めた。上海に着陸してバスでホテルに向かう。果てしなく続く街路樹の間を通ると高層建築が見えてくる。

かつての発展途上国から先進国へ進化する速さには驚いてしまう。上海のホテルに一泊して翌日は空路で

北京に向かった。宮殿全体が博物館になっている故宮(紫禁城)を見学。



ラストエンペラーで有名な宮殿建物の珍しさに疲れも忘れて歩きつづける。天安門広場はなるほど広い。門の前に堀があり、大きな道路が走って、その奥

が広場になつていて、たくさんの人たちが風揚げをしている。珍しい風が風に乗って実に見事だ。万里の長城は、尾根つたいに山に張りつくように続く壮大さにびっくりした。峰々を見上げながら、体力テストをやってみようかと腹を決めて登ってみる。急がず一歩また一歩なんとか目的地に到着。爽やかな初夏の風が心地よい。登頂証明を記念に受けて、登った道を折り返す。

翌日の西安観光はこれもまた見ごたえがある。兵馬俑坑、秦の始皇帝陵、華清池、大雁塔、碑林などを見学する。中国の歴史に肌で触れ、

「百聞は一見にしかず」の心境であつた。夕食後の唐代歌舞ショーでは、日本の歌で歓迎して貰い、一同感激ひとしおであつた。浦島太郎のおとぎば

なしが思い浮かんできた。こうして事故もなく、有意義な旅行ができたのは、役員の皆様方や、搭乗員の安達様、竹田様のお陰。記念写真もたくさん撮っていただき、ありがたく感謝いたします。

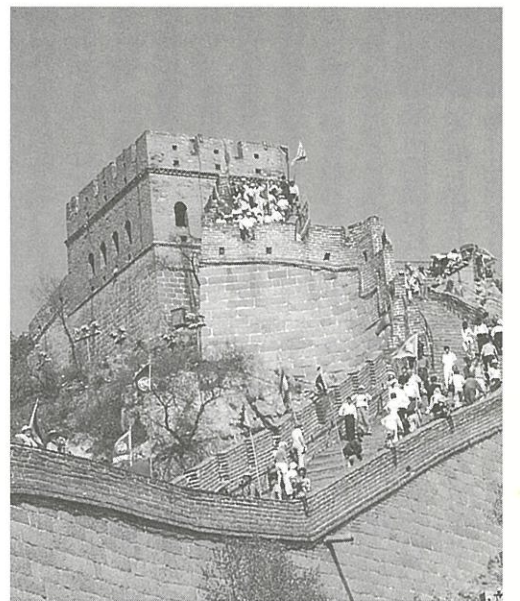
広大な国は人々の心もゆつたりしている

東京都●田中尚子

季刊誌八号に「北京、西安、五日間の旅」の案内を見たとき、思わず足腰の丈夫なうちに私も行ってみたいとの思いが頭の中をよぎった。

しかし、我が家には高齢の両親がおり、五日間も家を空けることができるかどうかと躊躇したが、夫と娘の協力に参加することになった。

ゴールデンウィーク中に中国を観光に訪れた人は二百万人もいたそうだ。そのため、車が渋滞して北京市内より八達嶺(万里の長城)まで一時間の道のりを、三時間も費やしたという。私たちは、それより二日遅い日程であつたため予定通り



に目的地に着いた。

「万里の長城」の写真は社会科の教科書に載っていたが、自分の足で登れようとは、この日まで考えてもいなかった。そして何よりも驚いたことは、かなりきつい行程を八十歳以上の方が、しっかりと足取りで遅れをとらずに登っておられたことだ。若輩の私が足腰の丈夫なうちになこと、考えたことが恥ずかしく思えた。

その後、明けの十三陵、天安門広場、翌日は故宮を見学したが、あまりの広さと豪華さに目を見張るばかりだった。西安での兵馬俑坑博物館には六千体もの兵

馬の並ぶ姿には圧倒された。さすが中国、広大なこの国は人々の心もゆつたりしている。まだ何処へ行くにも足を使わなければならぬようだ。日ごろ車社会に暮らす私にはかなりの負担であつた。「狭い日本そんなに急いでどこへ行く」という交通標語を思い出した。まさに実感である。

このたびの旅行は姉妹と弟(方丈様)三人揃つての海外旅行となつた。このようなご縁は今までなかったことで、これは仏様のお導きではなからうかと、ありがたく良い思い出を作らせて頂いたことに感謝しています。

「孟蘭盆」(うらぼん)は、梵語のウランバーナを音訳したことです。「ウランバーナ」は「逆さ吊りの苦しみを救う」という意味です

声聞第一 阿難尊者

どんな素晴らしい思想も借り物ではだめ

津南町龍源寺副住職 桑原行弘

禅宗のお寺で行われる春のどんごまき。幼い頃、お寺に行つて楽しくどんごを拾つた方も多いに違いない。この行事は涅槃会といわれ、お釈迦さまの命日に因んでお経を読み、その後どんごを拾う。

そして、必ずお釈迦さまが無くなられたときの様子を描いた大きな掛け軸の前で行われる。金色に輝くお釈迦さまの周りには、嘆き悲しむお弟子と信者、動物が多く描かれている。その中で悲しみのあまり気を失っている弟子、それが阿難尊者である。

阿難さんは二十五年間お釈迦さまのお世話役としてお側を離れず仕えたといわれる。十大弟子といわれる阿難さんは、最もお釈迦さまの説法を多く聞かれた弟子である。

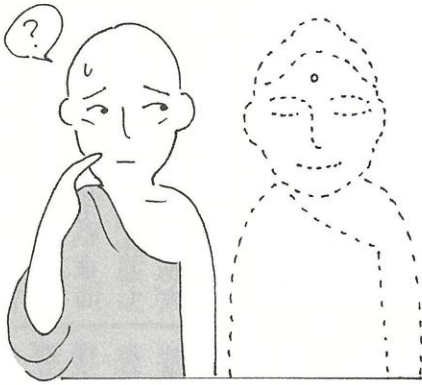
お釈迦さまの説法は八万四千といわれる。なぜ、多

くの教えとなつたかというところ、お釈迦さまに悩みを打ち明けアドバイスを受けた人達がたくさん訪れたからである。

お釈迦さまの説法は待機説法といつて、相手に合わせての説法である。当然、同じような悩みでも、よくよしている人は励まされ

ることができなかった。周りの弟子たちはお釈迦さまの指導で悟りを開いていくのに、お釈迦さまのお話を一番多く聞いていた阿難さんは悟れない。

しかし、お釈迦さまが亡くなって、一年もたたないうちに二十五年間悟れなかった阿難さんは悟ることができたというのである。



不遜な者を諫められたのだから、アドバイスも様々なものとなつた。

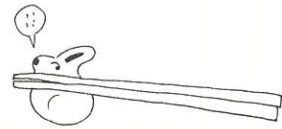
その待機説法を聞かれていた阿難さんはなかなか悟

これはきつと、お釈迦さまと、あまりにも近いところに身を置いたため、お釈迦さまと自分との区別がつかなくなつたのだと思われるし、様々な説法を聞きすぎたのかもしれない。禅の言葉に「他は是己にあらず」というのがある。どんな素晴らしい思想も宗教的境地も借り物ではだめで、自分自身のものにならねばならない。十大弟子の阿難尊者の逸

話を聞くにつけ、主体性の重要さが身にしみてくる。

昔の精進料理

長岡市 会田正勝



「精進」梵語ヴィルヤの訳で潔斎を意味するといわれています。そして、その最も簡略化されたものが、肉食をしないことです。

しかし、最も厳しい木食修行の坊さんは、火で調理したものは口にしないとされています。

しかも、米、麦、豆、粟、稗といった五穀も口にしません。五辛と呼ばれる香り高いものなどはもつてのほかです。五穀に含まれていない蕎麦の粉を水で練って、草木の葉や実などを加え

て火を使わず食べるのです。木食五行という人は、こうやって九十余才まで千数百体の仏像を作りました。長岡にもこの仏像が数多くあり文化財となっています。

普茶料理は代表的な精進料理です。辞典を見ますと江戸時代から行われた中国風の禅

寺料理で黄檗宗の僧によつて広まったとありま

血数が一汁一菜、二汁九菜と素朴な中に

も色彩が豊かで豪華な感じがするので、精進入りをした諸大名や高家に珍重されたそうです。

精進入りをすると獣、鳥、魚、卵、兔は、明治の中頃まで食べなかつたようです。普段の日でも獣肉を食べるときは仏間を閉切り、仏壇には目張りまでしたそうです。隣の蔵王領(蔵王



と石打は長岡領ではありませんが、精進日に魚を食べただけで名主の職を剥奪されたと聞いています。

兔に対する殺生の意識は卵より軽く、武士の妻で、兔、鳥を調理できないようでは、その資格がないといわれたほどで、江戸城では在府大名の元旦拝賀の席には必ず兔の吸い物が出されま

した。狸汁という話を聞きますが、これは田抜汁で蓮田から抜いた蓮根をすりおろし、これに麦粉を加え油で揚げ

たものを入れた汁です。本当の狸、熊、虎の肉を食べるのを薬食といい、病弱な人や如何物食いの旦那衆がこっそり食べたようです。

俳句でも冬の季語として使われていました。客僧の狸寝入りやくすり喰い 蕪村 くすり喰い 竹回箸とりかねし女かな

お釈迦さまの弟子「目蓮」は、餓鬼道に墮ちた亡き母を救うため、お釈迦さまの教えにより僧たちをもてなし、その功德によって母親を餓鬼道から救い出すことができました

ネパール紀行 最終回

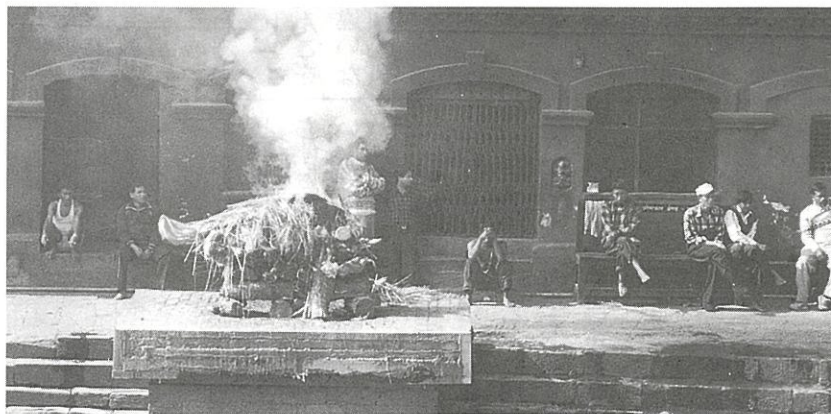
近藤マリ子

国王の宗教であるヒンドウ教。聖なる川パクマティ川のほとりにネパール最大の寺院「パシユパティナー」があります。そこを訪れたとき、ちょうど

三遺体の火葬が行われていました。

太い薪を組み立て、オイルを撒き、その上に遺体をのせて火を放つのです。焼き終わった遺骨は、寄せられた後、パクマティ川に流され、燃え残った薪も川に流されます。その黒焦げの薪を川に入れて拾っている人を見かけました。何をするのか尋ねましたら、拾い集めて売るのでそうです。

橋の上、対岸に



も観光客が大勢、火葬の一部始終を見学していました。野生の猿が沢山生息している場所でもあり、灰が流される先でも猿がびよん

びよん川に飛び込んでいる様子がいかにミスマッチな情景でした。

さらに驚いたことは、火葬場の川を隔てた真向かいに小学校があり、毎日火葬される人達を見ながら授業を受けている様子に呆然としたのですが、ヒンドウ教の子供だけが通う学校だそうです。「輪廻転生」の思想が生活の中に溶け込んでいるのか、自然体のことと受け取っている様子に感じられました。

最後に、このたびの旅のガイドをしてくださったカジ・シャキャ氏のことを少し触れたいと思います。

彼は、三十三才で二人の子供を持つ父親でもあり、トレッキングガイドの資格を持つ仏師ですが、傍らボランティアで貧しい子供達の里親運動をしている好青年でした。子供達に見せる彼の笑顔は、優しさに満ち

溢れたものでした。

彼は、三家族十九名で同居し、仕事をして頂いたお金は、全部お母さんに渡し、皆に分配してもらおうとか。

女性は、朝四時に起きて水汲みから始まり、朝から晩まで食事の支度と洗濯に追われ（冷蔵庫、洗濯機はない）生活は大変なようでしたが、旅の間何度か「家に行きましょう」と連れていってくれました。

家ではお兄さんが、家族が集まっている部屋の隅で小さな窓から入る明かりを頼りに、仏像を彫っていました。



人々は皆、信仰にとつぷりと漬かった日常で、これがあるからこの国の人たちは穏やかな心でいられるのだと思います。

文明・文化という名のもとで、生活スタイルを求めた先進国の生活からかけ離れた人間の、一番奇麗な生き方ではないかと感じてきました。

今回でネパール紀行は終わりますが、すっかり財布を預け、何の心配もなく、安心して旅を続けることが出来ましたのも、カジさんの親切でやさしい人柄のお陰！私のつたない紀行文でしたが、其の後七名の方が新しく里親になって下さいました。そして、カジさんからは、「里親の方は忙しいでしょうけれど子供達に手紙をください」「ネパールは日本から遠いけど、子供達に会いに来てください」との伝言がありました。

遠い国で勉強したくとも出来ない子供達のために、細々とですが、これからも頑張っていかなければと改めて感じて帰って参りました。

読者からの

便り



創刊十号の記念号にたくさんの方の投稿をいただきました。同封の原稿用紙を使わず、別紙で送ってくださる方もいらして、恐縮する思いです。

●龍弘師と私

福島市円通寺住職 吉岡棟憲

翠巖龍弘師とは駒沢大学一年生の竹友寮で出会って以来、大本山総持寺での修行まで絶えず行動をともにしました。まじめ一辺倒の龍弘師と、自由気ままな振る舞いをしていた私とは、性格が正反対なのになぜか気が合ったのです。

今でも不思議でなりません。きつと龍弘師には私に持ち合わせていないものを持ち、一種の憧れをいだかせていたのでしょうか。ラジオ短波で中国放送を聞いたり、授業をポイコットして反体制を表現したり、安易に時代に流されていく若者を批判する姿に、自分では真似のできない龍弘師の美学を見ることができました。

フオークソングを歌い、麻雀やパチンコなどに青春を謳歌する行動もありました。心底には翠巖龍弘師の確固たる信念が、師の言動を支配していた成熟度の高さへの憧れだったのでしょうか。

青年時代の情熱が今も衰えない翠巖龍弘師の今後の活躍が楽しみです。

●心に残ったある夏

北海道紋別市 須藤秀雄

平成六年の未だ流水の去らない彼岸の中日に、九六才の父と半日おいて母(九四才)を自宅で看取りました。

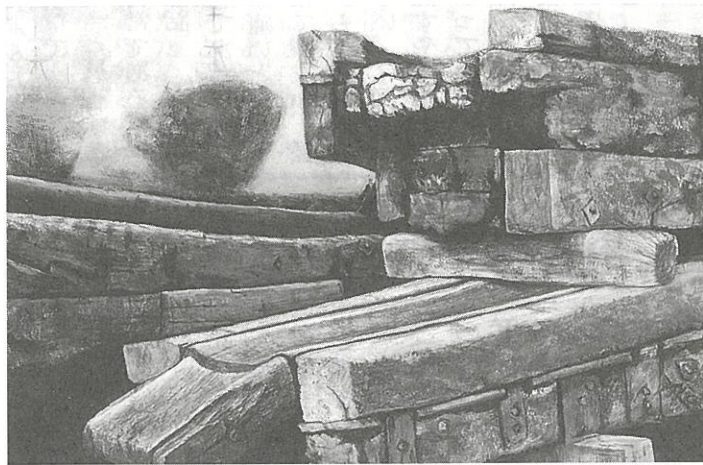
一年後初めて聞く蟬時雨の中、方丈様の厳肅ななかにも慈愛あふれる読経のもと、安善寺の近所で育った父と新湯生まれの母を故郷の地に還すことができました。

た。万感胸に迫るものがあり、落涙が白骨に一粒二粒、父母に送った最後の贈り物でした。

七十余年北海道に住みながらも、故郷は懐かしく忘れ難いものがあるように思いました。母の「内地に帰ろうかな」という言葉は、安善寺の境内で安らかに休むことだったのかもしれない。

私が長岡を訪れたのは七歳の子供の時、雁木の町と雪に覆われたお墓、笹船しか記憶にありませんが、この父母の故郷で兄弟の家族や子供達で法要を行えたことは、亡き父母が私達に贈ってくれた最大の機会だったと思います。

父が信心深く儉約を旨とし、教育に熱心だったのは、米百表の長岡の血が流れていたのだと感じた一族の旅でした。方丈様や奥様のご配慮で、無事法要を終えられたことを感謝し、また先住様を迎えました。



第59回 水彩連盟展2000 入選作品 「船台」 須藤秀雄

昭和平成を経て世紀末を迎えました。あの終戦から半世紀を終り、いま巨大企業による世界市場の支配競争の流れに加えて、情報科学の発展で、ますます経済第一の戦争が始まっています。

「幸せとは心の問題である」と中坊公平さんが言われましたが、まったくその通りだと思えます。いま日本人は心を失ったと思えます。欧米では、キリスト教を倫理道徳教育の中心に据えて青少年の心を豊かにしていると言われて

います。日本の青少年には、神や佛への理解があるのでしょうか。相次ぐ政官財界の不祥事は、その問題が基底にあるからです。お釈迦さまの四苦五戒を現代的に理解すれば、一連の事件は信じられないことでしょうか。

地球は有限、その中で人間社会です。利益を追い求めるだけの社会では人類の破滅だと思います。宗教の心を政治の中に生かされ

●今だから仏教の心を

柏崎市 須崎春雄

昭和平成を経て世紀末を迎えました。

あの終戦から半世紀を終り、いま巨大企業による世界市場の支配競争の流れに加えて、情報科学の発展で、ますます経済第一の戦争が始まっています。

「幸せとは心の問題である」と中坊公平さんが言われましたが、まったくその通りだと思えます。いま日本人は心を失ったと思えます。欧米では、キリスト教を倫理道徳教育の中心に据えて青少年の心を豊かにしていると言われて

います。日本の青少年には、神や佛への理解があるのでしょうか。相次ぐ政官財界の不祥事は、その問題が基底にあるからです。お釈迦さまの四苦五戒を現代的に理解すれば、一連の事件は信じられないことでしょうか。

地球は有限、その中で人間社会です。利益を追い求めるだけの社会では人類の破滅だと思います。宗教の心を政治の中に生かされ

たらと思えますが、皆さんはいかががお考えですか。

●四組の白鳥が翔んでいて

見附市 島田登志子

幼い頃、祖母に手を引かれて安善寺様に参りました。いつも「お前は色が黒くて」とオビズル様を撫でながら、私の頭を撫でてくれた懐かしい思い出がよみがえってきます。

今、縁を求めてか、縁に導かれてか、写経する幸せを感じていますが、祖父父母兄たち、主人亡き人になって本堂にお参りするときに、経文が心に浮かんできます。私流ですが、それが信心だと思っています。

先日のことでした。風呂上りに「ヒュルル」と白鳥の鳴き声が聞えたので、慌てて窓を開けました。残念ながらその姿は見えませんでした。しばらくして、孫と炬燵に入っていたときでした。「おばあちゃん、白鳥じゃない?」。急いで窓を開けたら、薄暗くなりかけ、富士山のような天空に四組の白鳥がヒュルヒュルと翔ん

でいて、一幅の墨絵を見るような光景に感動しました。毎日の殺伐としたニュースの中で、一家族がひとつになって空をはばたく自然の素晴らしさに、人間の社会もこのようであればと、家族で話し合ったものです。合掌

●老人のひとりごと

長岡市 臼井虔一

この二十年くらいの間、私が指針としてきた言葉は、

①物は移り変わる。

②他己は自己ではない。よって自己の思う通りにはならない。

一、六十才代

心身もあまり疲れていなかったし、やりたい仕事にも就けたし、現役の時と似た生き方でした。

二、七十才代から今日

この時期に一月ほど入院したり、家で寝ていたりした時があり、自分でも死ぬのではないかと思つた。この後は脚力も判断力も方々落ち、寝ていて立つことが大変、物忘れも進んで人

様のお世話になることが多い。くお返しもできない。

今、外の世界との関係で残っているのは、週に一回の寺の坐禅会と月に一回の土曜日の会(少年学院の先生方と旧栖吉中教員OBが中心になっている)だけである。どちらも、それぞ

れの方に連れていって頂くことで続いている。布施業をいただいております。ありがたく感謝しております。少しでもお返しと思つていて、気がついたのが「愛

から、家事も十分なことができない。それでいて相手に頼る所があるから、つい大声を出してしまうことがある。

先日、「イライラするとき、文句を先に言わないで、こうして欲しいと言うことにしよう」と話し合ったが、なかなか実行できない。「悪かった」と反省することの多い日常である。

三、お粗末な話
先日のことである。朝から家内が腹痛と言つて寝てしまい、昼食も夕食も摂らない。私は薬を探すやら腹をさすつてやるの一日を過ごした。夜、見つけた太田胃散を勧めると、素直に飲んで「さっぱりした」と言つて寝入った様子である。私は神経疲れと、夕方から寒気がして咳が出るので、酒粕汁を作つて飲み寝てしまった。

朝方、玄関先で人声がする

●坐禅会で感じたこと
長岡市 今泉参禅会員

坐禅会に参加させていただき、ありがとございます。いつも出席させていただき感じることは、御先代様のお写真のことです。お一人様は「よう縁があつたのう」と私を見てくださり、もうお一人様は「長くつづくかのう」と私を見てくださり、もうお一人様は「心してはげめよ」と声をかけてくださるように見えます。そして、御三方様でお話されているように感じます。

私も、今日も坐禅に参加

でも、私の心はコロコロといたずらに転がり、私を悩ませております。ほんとうに情けなく思います。御先代様方々の視線を背に感じながら、時間が過ぎて行きます。今日も御先代様に見守られて坐禅を続けて行けることができる喜び、また参加させていただく喜びを全身で感じ、深く深く感謝いたしております。合掌

●初めての海外旅行
長岡市 板山絢子

平成十年に思いがけずオーストラリアに行く機会がありました。最初は最後の海外旅行のつもりで行つて来ましたが、日本と違うところを私なりに書いてみました。

まず、感じたことは、空



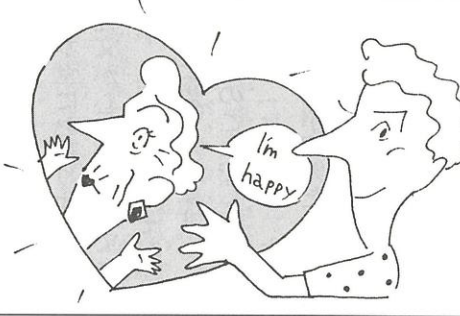
語」という言葉だった。これだと思つたが、なかなか身につかない。家内も私もそれぞれ要介護支援の身である

れと、夕方から寒気がして咳が出るので、酒粕汁を作つて飲み寝てしまった。

私も、今日も坐禅に参加

まず、感じたことは、空

とても印象的なことがありました。たくさんいる中国の方たちのツアーで、大変なお年寄りを一人の青年が抱きかかえるようにして連れていきましたが、ツアー全体がその二人に合わせるよう



に、ゆつくり歩いてるのに「負けた」と思いました。私は帰国してから、今までよりちょっと親切になりました。

●故郷福島町の閻魔堂

長岡市 小林十代次

暑さ寒さも彼岸までと申しますが、今年の気候はいかがなものでしょうか。

三月十一日は貞心尼の命日、閻魔堂でお経がある。思慕会の役員と奥村さんが参られた。



「福島町貞心尼思慕会」が完成され、長岡童話研究会

地元の建設会社アイビーホームのご努力により見事に完工し、除幕の式典が盛大

の協力をいただき歌碑が建立された。近年は良寛ブームで全国的に注目され、貞心尼居住史跡として訪れる人が多い。

平成六年、貞心尼思慕会は貞心尼草庵である閻魔堂の再建計画を立てました。地域住民と長岡良寛会及び全良寛会のご支援、さらに多くの方々の浄財をいただき、長岡市指定文化財「大櫓」の下で建設の運びとなりました。

に行われたのは、昨日のように思われる。

大櫓の葉が舞い落ちて一面の黄色となり、冬將軍が到来して雪国の長い冬がくる。そしてやがて春の足音が聞こえてくる。

七十歳の良寛と、清らかな愛情を詠み合った三十歳の尼僧貞心は、はちすの露の作品から「朝げたくほどは夜のまに、ふきよせるおち葉や、風の情けなるらむ」と詠まれた。

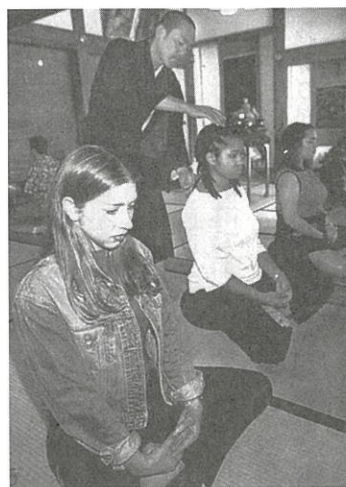
良寛が七四歳で癌によって死するまで、貞心は献身的に看護した。貞心は自らの肌で冷たい良寛の身体を温め、貞心は身も心も良寛と一つになる。それは、貞心の純粹な愛による物語と書かれていた。

貞心尼は良寛を看取るまで、福島町の閻魔堂から信濃川を渡し舟にて通ったという。慈悲が深く慈愛の心静かなる、ひたむきな情熱を燃やされたのではないのでしょうか。何かと暗いニュースが続いていますが、これからは明るい話題がある故郷でありたいものです。

米国の大学生が坐禅体験 佐藤正樹

長岡と姉妹都市を結んでいるアメリカ・フォートワース市の大学生たちが、五月二十五日、安善寺で坐禅を体験しました。

英語が苦手な方丈様と不肖佐藤が、四苦八苦しながら通訳を通じて、心の整え方、足の組み方や呼吸の整え方など、坐禅のベーシックA



BCを指導しました。日本人でも辛い坐禅、学生たちは真剣な表情で坐禅を組んでいましたが、終了の鐘が鳴ると同時に、「足がしびれて自分の足でないよう」と、足を伸ばしていましたが、「心を無にするには大変な努力が必要だと思つた」と率直な感想。

でも、短い時間でしたが、ほんの少し日本の文化に触れて貰えたよいうな気がします。

花祭り喜捨袋の御礼

今年は、朝から晴天に恵まれ、昨年同様、長岡市仏教会主催の花祭り行事が、大手通り商店街のご協力を得て歩行者天国で盛大に執り行われました。

喜捨袋のご協力が百七十

平成十二年五月二十七日、新潟日報中越版に記事とともに掲載されたものです。

お別れ

平成十二年二月末、六月二十日

坂内 仁様 三月一日寂
長岡市鉢伏町

中野 実様 三月六日寂
新津市草水町

石丸イツ様 三月廿日寂
長岡市呉服町

込田幸夫様 四月十三日寂
長岡市表町

大平謙太郎様 六月五日寂
長岡市永田

佐藤健司様 六月五日寂
長岡市東栄

五十嵐清一様 六月十六日寂
武蔵村山市

丹後子ヨ様 六月十七日寂
長岡市呉服町

ご冥福をお祈り申し上げます。

お姉ちゃんに愛のエールを...

恥ずかしいけど 近藤弘子代筆



苦手な寒い冬が終わって、新緑の素晴らしい春が来たと思つたら、もう暑い夏がやってきます。私もお寺で暮らすようになって、十二年になります。

お寺の境内に住んでいるカラスも、子が育ち、最近では家族で行動しており、すが、雛を育てている時は、親カラスも気が立っている

のか、猫が境内に入ってくる、親カラスは共同で低空飛行で威圧して追い払っており、安善寺では、先輩の私にまで襲ってきたのには、ビックリしました。ちようど外でバラの手入れをしていた住職が脇にいたのです...

すると、お父さんがカラスに向かって話しかけまし

た。「カー君や、ここにいる猫はペコと言つて、お寺のカワイイネコちゃんだよ。カー君たちを襲つたりしないから、カー君もお寺のペコちゃんを苛めないでくれよ!」と、私はとっても嬉しかったです。

カラスを見ると、大きな目をキョロキョロして、怖い声で鳴いていたのを止め、しばらく愛らしい顔で私たちを見つめており、その後は他の猫と私の場合では、態度が変わるようになりました。

そうそう、最近お母さんから、私にとつて淋しくなる話を聞かされました。それは、私をとつてもかわいがつてくれたお姉ちゃん(弘子)が結婚して、お寺から出ていくんだそうです。何時も私のトイレを綺麗にしておいてくれたり、ダイエツト食を買つて来てくれたりしていたのに...

でも相手の人は、私にとつては大変心強い存在であることがわかりました。

それは、彼が獣医さんなんだそうです。どうりで、私がチヨツと失敗して歯茎に魚の小骨が刺さり、抜けなくて困つているとき、彼はいつも簡単に抜いてくれたり、ちよつと調子が悪いなと思つていたとき、誰もが気がつかないのに、たまたま遊びに来た彼が私を見た途端、病院に連れていってくれたりしました。獣医さんはいいい人です。納得です!

結婚式は、七月二日だそうですね、季刊紙が皆さまに届くころには、若夫婦になつておりますネ。

二人の幸福を願ひ、私も愛のエールを贈りたいと思います。ニヤーン!

編集 雑感

●おかげさまで季刊誌「蔵王山安善寺」は創刊一〇号を迎えました。季刊誌の大切な役割は、お寺と檀信徒との間に温かな交流が育まれていることではないかと思つています。一〇号を記念して檀徒の皆様へ「お便り」をお願いしたところ、載せきれないほどたくさんのお便りをいただきました。誌上でしかお会いすることができませんが、読者の方たちとこんなふうにもみえ、お一人づつの思いの深さに接することができたことは、幸せな経験でした。

●実を申しますと、編集長は季刊誌を担当するまではお寺のことは何も知らなかつたのです。それがありがたいことに、こんなことを

和尚に聞こえたら「常識でしよう!」と、叱られそうですが、近頃は、曹洞宗の宗祖は? 本尊は? 経典は? 本山は? など少しですが分かつてきました。

●けど、若い檀家の皆様にとつては、仏壇のまつり方、日常のおつとめ、お彼岸やお盆のしきたりなどは、チンプンカンプンでしょう。ましてや葬儀や法要のしきたりに至つては、右も左も見当がつかみません。季刊誌を通じて「うちのお寺とのつきあい方」がわかり、半歩でも一歩でも前進した信仰のお手伝いができたらいいなと思います。お寺は年寄りのもの、付き合ひはお盆と法事に葬式だけでは、敷居が高すぎますから。

●こんなつまらないことを聞いたら恥ずかしい、なんてことはありません。どんな疑問や質問、身の周りで感じたことなども歓迎です。から、お便りをFAXかEメールでお寄せください。新たな誌面に反映したいと思つております。よろしくお願ひいたします。■安藤

お便りをお待ちしております

季刊誌への投稿、お便りをお待ちしております。また、季刊誌に関するご意見、ご感想、あるいは、こんな企画をとりあげてほしいなどのご希望をぜひお寄せください。

〒940-0052

長岡市神田町1-4-10

蔵王山 安善寺 近藤 龍弘宛

FAX.0258-32-2870

E-mail:vc2r-kndu@asahi-net.or.jp